

銀河の一滴

千田百里の青春小説

銀河より
一滴こぼれ
水の星

学生時代に傾倒していた
文芸の世界から、

気付けば、遠いところを
漂流していた。

と、蜂崎さんは述懐している。

そんな作者に「銀河の一滴」と
なったのが、俳句であった。

この一滴が、やがて大海を
成すであろうことを

期待して止まない。

千田百里

こま結び解けぬ絡みの去年今年

新海苔の艶は海面にある光

ま
ま
な
ら
ぬ
夢
積
も
り
ゆ
く
夜
の
雪

欺
か
ぬ
水
面
の
光
春
隣

先
駆
く
る
梅
一
輪
の
心
意
気

春
き
ざ
す
立
ち
木
は
空
に
明
朝
体

灯を消せば段騒がしき雛の宴

沈丁花雨と和みて宵に入る

春風やねむる仔猫のひげの先

ふつくらと海剥き出すや浅蜷汁

蛇行して日差し貯めゆく春の川

春夕日池平に接し地へ蕩く

石鹼玉弾けて残る風の色

萱屋根を包みて余る春日かな

薬を吉兆と読むご神木

子の握手母が返して入学す

逃げ水や遠近法の消失点

行く春や要らぬ名刺の厚き束

若葉にも日面日裏すでにあり

食む風は強きが美味し鯉のぼり

少女らの噂密かや柚子の花

梅雨入りや白紙委任の返もせず

瀬祭と嘯く書斎徽匂ふ

睡蓮の雨滴小さな天を張る

あめんぼの風の隙衝く平泳ぎ

仏足の螺鋼曼荼羅暑を服し

宮
薙ぎや手水の紙垂の風新た

ひとり言がさり崩るるかき氷

酒は濃し紫蘇の香強し雨の夜は

一幅の画賛に紙魚が口挿み

揚花火散り落つ音の閑かさや

膀の緒へ修羅語りたし土用干

手花火の尽きて火籠る目蓋裏

鉄棒の赤錆育つ夏休

夕焼を擦つて列車は導火線

流燈ややがて心の点となり

残る果も摘果も太く秋に入る

名月やほどよく雲と折り合うて

弘暁の峰より染めし初紅葉

鯨の針外すを見つめ父となる

会うて知る貧乏神の爽やかさ

秋の灯や無聊慰む杜甫李白

渡御待ちぬ秋天今や明けんとす

行聴の抛る神輿や秋高し

荒神輿納めて高き月と遇ふ

天網を漏れて勢ふ鱗雲

常夜燈点す人なし秋の暮

蓑虫の糸や夕日も吊したり

手で割りし君への林檎ぶつきらぼう

毬栗や関羽に負けぬ面構へ

句集 銀河の一滴

発行 2016年9月20日

著者 峰崎成規

〒272-0103 千葉県市川市本行徳10-9

発行所 鳩書房

〒272-8519 千葉県市川市八幡6-16-19

電話 047-334-4975

印刷・製本 株式会社 弘文社

〒272-0033 千葉県市川市市川南2-7-2

電話 047-324-5977

定価 2800円(税別)

著者略歴

峰崎成規 (みねざき・しげのり)

1948年 千葉県市川市生まれ

2010年 作句開始

2012年 「沖」入会

2013年 第27回千葉県俳句作家協会新人賞受賞

2014年 「沖」同人、沖新人奨励賞受賞

俳人協会会員

千葉県俳句作家協会会員